
今日という日は雨

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日という日は雨

【Nコード】

N1330A

【作者名】

春

【あらすじ】

ちせ&p;、シュウジとアケミ&p;、アツシのストーリー。

シュウジ「ち…せ…」

その青年の見る先には腕が銃のようになった彼女がいた。

銃の先には白煙がたっている。

銃口は青年の方を向いていた。

青年の胸には穴が空き、血が出ていた。

ちせ「浮気するからだべさ？」

ベシャッと音を立て、青年は倒れた。

シュウジ「そんなわけないよな」

と汗だくで目を覚ました。

どうやら夢だったみたいだ。

外は雨が降っていて、横には彼女―ちせが寝ている。

あれからやっと戦争が終結し、復興が始まった。と言っても周りはガレキの山で、どこから手をつけていいか分からない状態だった。

それでも少しずつ、少しずつ復興は進んでいた。しかし何故二人は同じベッドで寝ていたかと言うと…。

シュウジ（うひゃー、情けねー、あのまま寝ちまったようだな…）

ちせを見ながらその夜にあった出来事を確認した。

ちせ「うにゃ…？…シュウちゃん…そこ…ダメ…」

ちせは何か夢を見ているのか、寝言を言った。

シュウジ「……………」

シュウジの親は出張で家に居なかった。

ちせは勝手に家を出てきてシュウジの家に来ていたのだ。

シュウジ「ちせ、起きろ。学校遅れるぞ」

ちせ「あう？シュウちゃん…ここどこ？」

シュウジ「あー寝ぼけてやがんな、オレン家だ。ほら、起きろ」

ちせの体をゆっくりと起こした。

ちせ「ふぁ…はう…おはよー、シュウちゃん」

シュウジ「ちせ…服が…」

ちせ「え…?」

制服に目をやると、

ちせ「あ!うう…」

見事に制服がぐしゃぐしゃになっていて、その少しはだけた服からはあまりふくよかではない胸が見えた。

シュウジ「はは、相変わらず寝相悪いな」

と笑ったと思ったら、

シュウジ「……」

ちせ「シュウちゃん?どこ見てるの?」

シュウジの目線は明らかにそのあまりふくよかではない胸を見ていた。

シュウジ「………」

ちせ「…スケベシュウちゃん」

シュウジ「うっ…」

シュウジはナイフを胸に刺されたような感じがした。

ちせ「…学校…行くの?」

その寝ぼけたような、濁りのない目で見つめてきた。

シュウジ「え…?」

ちせ「まだ…一緒に居たい」

一瞬の間があって、

シュウジ「アホ、いつも一緒じゃねえか」

少し顔を赤く染めて言い返した。

ちせ「うん♪」

シュウジ「でもどうするべ?制服」

ちせ「………」

今度は少しの沈黙。

ちせ「家に取りに帰ってみる」

シュウジ「…時間ないべ?…」

ちせ「あうっ…」

シュウジ「それに、黙って出てきたんだろ？怒られるべ？」

ちせ「あううっ…」

次々と問題点を指摘されて困り果ててしまった。

シュウジ「……………」

ちせ「……………」

今度は長めの沈黙があった。

シュウジ「…やめようか…」

ちせ「え？」

シュウジ「今日は学校行くのやめようかって聞いたんだよ」

思いがけない提案にちせは少し驚いた。

シュウジ「外は雨だし勉強だったらオレが」

教えてやる。と言おうとしたら

シュウジ「うっ？」

いきなりちせがシュウジを押し倒してきた。

ベッドの上にはふっと音をたて、そのままゆっくりとキスをした。

ちせ「勉強も…ヤダ」

シュウジ「ん…」

シュウジはちせを優しく抱きしめた。

ちせはシュウジの頭を持ちながらキスをしている。

ちせ「…はあ…シュウちゃん」

シュウジ「…ちせ」

シュウジの手がちせの制服にかかり、脱がしていく。

ちせ「あ…シュウちゃん」

シュウジ「すまん、やっぱオレはスケベだわ」

そこには一点の曇りもない白磁のような肢体。まだ未成熟なせいかあからさまな膨らみのない、ただ流麗な曲線で描かれる、清冽の姿。

シュウジは裸になったちせの体を触れていく。

ちせ「ふあ…ん…」

そしてちせはシュウジのそれに身をまかせた。

体中が熱くなっていくような感じがした。

昨日はここまでいっていた。

しかしシュウジがそのまま寝てしまっ、ちせは仕方なく、一緒に布団に寝たのだ。

ちせ「…今度は寝ないでね？」

シュウジ「それはないべ…」

ちせ「うん…」

数回、相手の体に触れ、少しずつその準備をした。

シュウジ「ちせ…いいか？」

ちせ「シュウちゃん…」

シュウジ「ん？」

顔をこれ以上ないぐらい赤く染め、

ちせ「恥ずかしいよう…」

シュウジ「アホ、当たり前だがや…」

そして、そのまま…

ちせ「はうっ！…」

シュウジ「くっ…」

ちせ「シュウちゃん…シュウちゃん…」

シュウジ「動くぞ…ちせ…」

ちせ「あ…くあ…ふあ…うん…」

その部屋の中には動く1つの影だけがあった…。

学校は休み時間。

アケミは学校で窓から雨が降る暗い空を見つつ、ぼーっとしていた。

アケミ（シュウジとちせ、学校来ないな…2人でナニしてんだろ？）

と、少しいけない妄想をしつつ

アケミ（いかんいかん、まさかそんなはず…）

自分を保つが…

アケミ（でも…あゝ！もう！何考えてるのよ！あたしは！）

さすがにこれ以上は考えることが出来なかった。その時、

アツシ「アケミ、何ぼーっとしているんだ？」

アツシが話しかけてきた。

少しふてくされながら、

アケミ「シュウジとちせ来ないなー、と思って」

アツシ「そういえばそうだな…」

アケミ「……………」

アツシ「……………」

2人共黙ってしまった。そういえば付き合い始めてこんなことが多くなっていた。

別に相手の事が嫌いなわけではない、そもそも嫌いだったら付き合い合えないはずだ。

ただ、なんというか、恥ずかしい…のような感情に近い、何か。

その何かを2人は気付いているのか、いないのか…。

アケミ（全く、なんで話さないのよ…）

アケミはイライラしていた。

そのオーラを感じとったのか、

アツシ（ど、どうしよう…）

困っていた。

アツシ（あゝ、どうするべ？…シュウジならなんて言うだろう…）

その考えから1つの答えを出した。

しかし、その考えは相手がちせだから言うであろうことで、相手が

あのアケミだから多分、怒る。

でも考えてしまったのは仕方がない。それ以外の方法が思いつかない。

アツシは口を開いた。

アツシ「アケミ…」

アケミ「ん？」

アツシ「今日、俺ん家に来ないか？」

思いがけない一言に、

アケミ「え…？」

と驚くしかなかった。

今の言葉は幻聴ではないか？聞き間違いではないか？

少し混乱しながら確認する。

アケミ「今…なんて言ったの？」

あまり怒っていないようで少し安堵を覚えつつその問いにすぐに答える。

アツシ「今日、学校終わったら俺の家に来ないかって聞いたんだ」
聞き間違いでも幻聴でもなかった、その事に嬉しいような恥ずかしいような顔をしながらアケミもその問いに答える。

アケミ「いいわよ」

その答えに心の中で密かに喜ぶ。
が、

アケミ「どうせ家に帰って勉強もしないし、退屈だからね」
と、少しひねくれながら言った。

アツシはその言葉に少し悲しみ覚えつつ、
アツシ（そうだよなあ、俺達ってまだそんなほいほいとやれる関係
までいってないよなあ）

と、思った。

とりあえず話題を戻して、

アツシ「それにしてもシュウジとちせちゃんはどうしたんだろうな」
アケミ「さあ？ホント、何してるんだろ？」

その頃、当の本人達は1つのベッドに並んで横になっていた。

シュウジ「ちせ…大丈夫だったか？」

また顔を赤くしながら答える。

ちせ「うん…少し痛かったけど…気持ちよかった…」

シュウジも顔を赤くした。

ちせ「シュウちゃん…大好き♪」

シュウジ「俺もだ、ちせ」

そして2人はキスをした。

そのキスが終わって、ちせが

「シュウちゃん、あのね…」

と、願い事でもするかのような感じで言ってきた。

シュウジ「ん…？」

ちせ「あのね…ふゆみ先輩とかと浮気しないでね？」

その時、シュウジは朝の夢を思いだして、冷や汗が少し出た。

シュウジ「は、はは…当たり前だよ…」

ちせは満面の笑みで

ちせ「うん♪」

と答えた。

そして今日が終わる。

今日も終わる。

1つの星の下で…。

—END—

(後書き)

すいません。暴走しました。というかこの小説自体暴走の塊みたいな感じ(笑)

いやー、あとがきを書くのも久しぶりだなァ。と、しみじみしてみたり、眠いなぁ、と睡魔に襲われていたりする今日この頃。

本編についてですが、見直しても自分の暴走っぷりがスゴかったり、よくこんな書けたな、自分。そろそろ眠いのでこの辺でおいとまします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330a/>

今日という日は雨

2010年10月9日14時07分発行